

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第173号・平成16年2月1日

年表で読む

古平の歴史

《79》

古平の鮭漁

■鮭という字

先日、中国からの研修生に話を

する機会があつたが、通訳の方

が、「たら」という字はこうゆ

う字ですね」と言つて『鮭』と

いう字を書いて見せた。

中国では漢字の大改革で、元

の字の特徴を残しながら字画を

省略した文字が使われている。

昔の中国から文字を学んだ日本

が多く古くからの文字を使っ

ているのに、本家本元の中国が

漢字の改革をしたとは驚きでも

ある。そんな状況の中で、日本

で作られた文字（国字）である

『鮭』という字が中国でもそ

まま使われているとは意外だつ

た。これは、中国人が鮭の仲間であるを干したメンタイ（明太）が大好物であることが理由かも知れない。

■どうして鮭か

二百年程前の本の中に「鮭は初雪の後にとれる魚なので雪に従う」と、その後に出た本にも

「鮭は雪中にとれるのでこの字がつくられた」とある。また、

「タラの身は純白なので魚に雪がつくられた」とある。また、

「ほかに鮭は、皮膚のまだら模様」「太腹の意味」などなど。

なる程タラの腹は巨大である。

タラの仲間の代表はマダラだ

が、これはマサバ・マイワシなどの真という意味からではなく、皮膚の斑点がまだらであることによる。

■鮭に関する珍しい話

鮭の伝承や珍話などには事欠かないが、ひとつ――

「カナダの太平洋岸の島に住む靴職人ヘンリー君にはマーシーという恋人がいた。しかし、エンゲージリングもプレゼントできぬような男には娘はやれん、と両親は激しく反対した。

そんな十二月二十四日のこと、

ベーリング海で獲れたと、友人から一匹の大鮭が届けられた。

調理していく内蔵を開いたら、

そこにはまぶしいばかりのダイヤの指輪。あまりの出来事に

「神の恵みだ！ 奇跡だ！」と

その場にへたり込んでしまった。

「鮭がとりもつ縁で、二人が結ばれたのはいうまでもない。」

この話は一八九三年、ニューヨーク市発刊の『漁業公報』に掲載された。（一九四三・黒沼勝造が日本語訳した）

どにいたるまで話は盛沢山。鮭がカレイを笑う。昔の蝦夷地の話から――

「寒い冬の夜のこと、炉端のたき火がなかなか燃えつかぬ。カレイが口をとがらせて火吹き竹を吹いて火をおこしている。それがおかしいとタラが大口を開けて笑う。失礼なやつだとカレイが横目でにらむ。タラはダボラ吹きだと物語の世界でもきまっている。それもこれもみんな

□が大きいばかりに……」

■冬の海の悲劇

物語の世界をはなれて、鮭漁は何せ冬が最盛期、時化や寒さなど、重労働に加えて昔は死と

対決する男の荒仕事であった。

鮭船の一つ運らぬ吹雪かな

北十字かかげて荒るる鮭場かな

鮭漁にかかるわって、日本各地には昔から数知れない程の悲劇があつた。

古平でもその事実のはつきり伝わっているのは少ないが、昔から犠牲者が多く仲間にによる相

互扶助の組織が生まれた。

今回は鮭難談で終わつたが、次号は鮭漁での海難について。

大正一一年

▼一一月一六日

今日も朝からチラチラ雪が降り寒い。熊さんも農園の仕事を休む。午前中、熊さんに銀行へ預金と、丸山町渡辺清七への力

しい。子供等は皆ダルマ靴を履いて登校した。熊さんと父は畠へ行き大根抜きをし、道具類をソリで板倉まで運搬している。

▼一一月一一日

今日も朝からの雪降り、寒さ

に可哀想なことだ。みぞれ雪が降り出し、町は一面花吹雪の

戸沢でカレ網を揚げたところサメが大漁、六〇〇尾も獲れた

とのこと、今年の初漁、一尾三〇

錢、一八〇円にもなつたとのことだ。

▼一一月一九日

今日も朝から雪が降り寒さが

大雨となる。雪の消えること甚だしい。私は外套を着て、朝の散歩をする。浜町中を廻り、一時間程で帰る。朝食はおいしい。父と

熊さんは畠でネギ掘りをする。

▼一一月二二日

起床六時半、朝方から突然の

大雨となる。雪の消えること甚

だしい。私は外套を着て、朝の散

歩をする。浜町中を廻り、一時間

程で帰る。朝食はおいしい。父と

熊さんは畠でネギ掘りをする。

▼一一月二四日

朝から雪だ。今朝は七時に起

床する。雪は五寸も積もつた。

熊さんと雪かきをやる。場所が

あるのでなかなか手間どる。一

人なら大仕事だ。朝食前の運動

で、大いに朝食もおいしい。一

時、父の葬式送りに行く。父と熊

さんは倉片付けやら裏の仕事

をしている。父はこの頃元気になつたようだ。気持ちが良いことだ。

高野名幸作さんの日記から

【74】

足で一〇円割りに安いものだ。
▼一一月一七日

寒気は少しもゆるまず、軒先にはツララも見える。夜、困へ行き子供等の長靴を買ってやる。三

まつたく寒中の如し。町中を早

や馬そりがチリンチリンと音をたて走っている。このところの

雪で一面の銀世界になつてい

る。カレ網もナギが良ければ明

日あたり出初めするだろう。寒

暖計は三四度(約一度C)まで下がつている。

▼一一月一八日

起床七時、この頃の六時はま

だ暗く日も短くなつた。朝から雪が降り寒い。いよいよ根雪ら

が降り始める。

▼一一月一九日

続く。畠仕事はできないので、リ

ンゴの囲い、倉の片付け仕事などをしてやっている。カレ網の客がひつきりなしに来る。

▼一一月一〇日

今日もまた朝から雪で、どう

とう根雪になつてしまつたよう

だ。去る一四日以来毎日の雪だ。

起床六時、寒い朝だ。洗面後

早々に悦三をおんぶして浜に

出て見る。大謀が網起こしをし

てある。上ナギで、カレ網やら釣

り船などが遙か沖合いを帆を掛けているのが見える。悦三は、朝

起きて浜に出て見ると喜んでい

る。父と熊さんは雪も余程消え

たので農園行き。私は店番。鱗刺網二〇〇間、アバ繩その他売る。

カレ網用品を群来村から買いに

けぬ。

起床六時半、朝方から突然の

雪が降り始める。

▼一一月一二日

今日も朝からの雪降り、寒さ

は相変わらずだ。

起床六時半、朝方から突然の

雪が降り始める。

▼一一月一三日

今日は朝から暖氣で雪も消

え、道路はザブザブだ。洗面後

早々に悦三をおんぶして浜に

出て見る。大謀が網起こしをし

てある。上ナギで、カレ網やら釣

り船などが遙か沖合いを帆を掛けているのが見える。悦三は、朝

起きて浜に出て見ると喜んでい

る。父と熊さんは雪も余程消え

たので農園行き。私は店番。鱗刺

網二〇〇間、アバ繩その他売る。

カレ網用品を群来村から買いに

けぬ。

起床六時半、朝方から突然の

雪が降り始める。

▼一一月一四日

朝から雪だ。今朝は七時に起

床する。雪は五寸も積もつた。

熊さんと雪かきをやる。場所が

あるのでなかなか手間どる。一

人なら大仕事だ。朝食前の運動

で、大いに朝食もおいしい。一

時、父の葬式送りに行く。父と熊

さんは倉片付けやら裏の仕事

をしている。父はこの頃元気になつたようだ。気持ちが良いことだ。

▼一一月一五日

起床六時、寒い朝だ。洗面後

例によつて市中を散歩する。町

は雪が凍つて、足駄だとツルツ

ルすべる。波はかなりあるよう

だがカレ網は出た。父と熊さん

は農園で長イモ掘りなどをや

る。父は夕方帰つてから宝海寺

へお参りに行く。私は店のガラ

ス戸など拭き掃除をやる。寒い

夜だが、店にはまだコタツをか

けぬ。

起床六時半、朝方から突然の

雪が降り始める。

▼一一月一六日

朝からチラチラ雪が降り寒い。熊さんも農園の仕事を

休む。午前中、熊さんに銀行へ

預金と、丸山町渡辺清七への力

レ網、ロープ類を届けてもらう。

午後、港町方面からもカレ網や

ロープなどの注文があり、朝か

ら三回も新地方面へ行つた。今

日あたりから店も忙しくなる。

寒気は少しもゆるまず、軒先にはツララも見える。夜、困へ行き子供等の長靴を買ってやる。三

足で一〇円割りに安いものだ。

▼一一月一七日

今日も朝から雪、寒いこと

まつたく寒中の如し。町中を早

や馬そりがチリンチリンと音を

たて走っている。このところの

雪で一面の銀世界になつてい

る。カレ網もナギが良ければ明

日あたり出初めするだろう。寒

暖計は三四度(約一度C)まで下がつている。

▼一一月一八日

起床七時、この頃の六時はま

だ暗く日も短くなつた。朝から雪が降り寒い。いよいよ根雪ら

が降り始める。

▼一一月一九日

続く。畠仕事はできないので、リ

ンゴの囲い、倉の片付け仕事などをしてやっている。カレ網の客がひつきりなしに来る。

▼一一月一〇日

今日もまた朝から雪で、どう

とう根雪になつてしまつたよう

だ。去る一四日以来毎日の雪だ。

起床六時半、朝方から突然の

雪が降り始める。

▼一一月一二日

朝から雪だ。今朝は七時に起

床する。雪は五寸も積もつた。

熊さんと雪かきをやる。場所が

あるのでなかなか手間どる。一

人なら大仕事だ。朝食前の運動

で、大いに朝食もおいしい。一

時、父の葬式送りに行く。父と熊

さんは倉片付けやら裏の仕事

をしている。父はこの頃元気になつたようだ。気持ちが良いことだ。

▼一一月一五日

起床六時、寒い朝だ。洗面後

例によつて市中を散歩する。町

は雪が凍つて、足駄だとツルツ

ルすべる。波はかなりあるよう

だがカレ網は出た。父と熊さん

は農園で長イモ掘りなどをや

る。父は夕方帰つてから宝海寺

へお参りに行く。私は店のガラ

ス戸など拭き掃除をやる。寒い

夜だが、店にはまだコタツをか

けぬ。

▼一一月一七日

大吹雪だ。時化のため漁船は出られぬ。熊さん掛け取りに出かけ一〇〇余円集金して帰る。不景気のため集金も思わず無い。父は今日も宝海寺へお参りに行く、夜平田さんへ話に行く。一〇時頃帰ったが、大吹雪になつた。

▼一一月一八日 寒い朝だ。カレ網も時化で出られぬ。母の命日で和尚さんが来られる。三時頃まで父と話をして帰られた。店は閑散。リンゴ小売りの看板を出したら、毎日四、五人の客がある。今日も小売りをするという女に二〇〇斤売る。四九号の中玉を一斤三錢にしてやる。

▼一一月一九日 寒い日だ。熊さんは沖村方面へ掛け取りに出かけた。店は閑散な方だ。大謀も近々中に揚綱する由。ブリも大分値が下がつたので困つたとのことだ。本年は何を買った人も損ばかりしたというが、これも不況のせいなのだ。

▼一一月三〇日 起床六時半、雪はしきりに降

つている。浜へ出て見る。ハタハタの初漁があり、イサバヤ連中が町中を売つて歩いている。沖には大きな汽船が四隻、時化で停泊している。禪源寺の裏の池から学校の裏まで、木管で水を引く工事をしているが、寒いの火を焚きながらの工事だ。カレ網も多く出ているがまだ思つた程の漁が無いので、一向に入金の方も無い。今日から店にコタツをかけた。

▼一一月一日 いよいよ一一月になった。今年は近年まれな不景気とのこと。何商売も損ばかりとてあちこちで家や土地などの売り物がある。夜新地古盛座で火防衛生の活動写真があり見に行く。

一時帰る。寒い寒い一日であった。

▼一一月二日 起床七時、雪がちらちら降り出し寒さも厳しいことだ。店はカレ網は皆出た。店は閑散のほうだ。リンゴ買いの客が五、六人来て三円程売つた。大謀も終漁が近くなつたようだ。

▼一一月三日 起床六時、まだ薄暗い。今朝は

戈買いがぼつぼつ来る。今日一日で雪もすいぶん降つた。

▼一一月四日

今日はようやくナギになり、漁船も皆出た。店は今日はリンゴ買いの客で忙しい。大謀の漁士産にするというので、四〇〇斤程売る。四九号並で一斤三錢五厘、これなら安いものだ。父と熊さんは農園行き。夜九時頃、梅野君に誘われて学校へ行く。社会改善講演会があり、道序から係官が来て禁酒の宣伝、終わって正隆寺大石住職と横山君の講話があり、一〇時半帰る。

▼一一月五日 起床七時、朝の内は天気快晴

カレ網は皆出た。店は閑散のほうだ。リンゴ買いが時々来る。午後から大吹雪になり板戸を閉める。漁船に何事もなければよいが、新聞を見ても一般に不景気の由。ことに当地の海産商連もずいぶん損害を受けたとのこと。我々は大してもうけもせ

ぬ代わりに、こんな不況にも特別心配はない。一〇時頃から吹雪がますます甚だしく、板戸を打つ音も恐ろしい程だ。

▼一一月六日

昨夜来の猛吹雪は実に近来にないことだ。電気は故障が続き、朝までに三、四回も消えた。二階はミリミリ音がする程揺れた。起きて戸外を見ると、向かいのガラス戸に大きな吹きだまりが出来ている。熊さんと二人で二時間程も雪投げをした。海は

大時化だ。今夜、因で部落会の会合がある。聞けば昨日入船町方面で川崎船の遭難があり、一人が死んだとのこと。古平署長深瀬紳吉氏が休職に付き、後任に富尾直治という人が来るとのことだ。一〇時帰る。

▼一一月八日

新地方面行き。四へ寄り九〇円のうち六〇円の入金がある。帰途、舟に寄り話をし、「ヨに寄りイカ漁があつたとかでイカを沢山貰い一時に帰る。

(続き)



雪ぐに大澤文子

新年早々から和やかな日が続き、さすが申年……と謳歌していくのにめくる暦が『小寒』を告げると同時に、「寒気が流れ込んで雪の降る厳しい天気が続く」と報じられた。予想どおり北国は連日の猛烈な風雪。

雪国に暮らしたことのない人々には、またたく間に、街中を白一色に変える威力を知る由もないであろう。だが寒いつめたい冬の最中でも、ふと素敵な思いをすることも多々ある。

先日
凍る雪道をギニッギニ
ツヒリズミカルにきしませ、静
かに歩いて行かれる人を見かけ
た。昔懐かしい雪下駄の音に、
私は振り返った。

れ、今にも折れんばかり——「天と地の間に充满して、次から次へと落ちてくる無数の雪片には、肅々としてあらゆるものとを圧倒する不気味な力が感じられる……」いつか、お天氣博士倉嶋厚氏がある新聞紙上に述べておられたが、今さらながら合点がいく。

ネズミ色のショールを深々と肩にかけ、緑色の小袋を片手に下げたお年寄り。私の気配に、はつと歩みを止められた。

「お寺参りなのでねエ。しばらくぶりに着物を着て雪下駄を履いて來たんですよ」と、にこやかに挨拶された。雪国のお年寄りは品がよく美しい。

「雪は闇の国からやつてきた大軍」と言うそうだ。その力は出合い頭に襲いかかり、逃げないものを下敷きにする。と表現されているという。

「よくお似合いですねエ」
ふたことみこと話し合い「お気
をつけてネ」と声をかけると、
「ありがとうございます」と小
腰をかがめ丁寧に挨拶をされ、
再びキュツキュツと凍てみちを

「ああ、いいなア」
私は言葉にならない溜め息をついた。
若かりし頃、私もよくあやつて凍る雪みちを好みの鼻緒をたててもらい、好きな着物に紺の袴を身につけ、毎朝毎夕キュツキュツとリズミカルな音に気負いつつ何年か勤めに出たつけ……。
そんな懐かしい思い出をよそに幾夜続く猛吹雪か。一月の末ともなれば、そろそろ太宰府の梅便りも聞こえてくるはずなのに……。
北ぐにの人々にとつては唯一の華やぎは梅便りと言えそう。何年か前、福岡に住む次男夫婦から「梅を見に来ないか?」と、誘いの電話があつた。
一も二もなく賛成、早々夫と旅に出た。
東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそかの有名な菅原道真公を慕つて飛んで来たという、謂れのある老木「飛梅」が太宰府の天満宮の境内にある。今でものびやかに青空に向かい枝々をのばし、

老木となつても美しく咲き誇つてゐるという。低い木の柵に囲われてゐる「飛梅」。私はあの時そつと飛梅の肌にふれて見た。なんとかく優しみのある感触、いまでも手のひらに蘇り懐かしい。

その後、太宰府の白梅の鉢が送られてきた。清酒の空き箱にまるめられた新聞紙と同居、窮屈であつたろうに、ふくらんだ蕾はそのままわが家へ到着。

もしかしてあの「飛梅」の子孫? かな。そんな他愛のない思いにねぎらいの言葉をかけた。

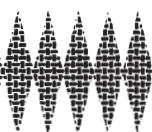
わが家の最高の場所、日のよく当たる本棚の中程に収めた。日に次いで小さな蕾は一輪また一輪とほころびはじめ、わが家の唯一の華やぎとなつた。

連日の猛吹雪も止み、しばらくぶりに枯れ山の間を朱く染め昇る陽を見た。

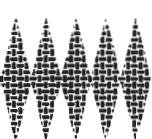
ふと陽気に誘われ丘の登り口に立つて見た。時折、かさかさと雪のかたまりが生きもののように落ちる。風のいたずらか、誰か耳元でささやく気配がし、幻想的な世界に身をおく思いさえするのは何故……か。

札幌通信 第14信

吉川義雄



故事来歴



しなかつた。

今なら漢字で書けるが「ベン
テン」「エビス」「スイテング
ウ」「カンノン」「ナリタ」な
ど、大人にまねて、子供達もサ
ン付けで呼んでいた。

十坪程の狭い裏庭だが、南側
の陽光に雀の群れがよくやつて
くる。

古平にいた頃は珍しくもない
鳥だが、都会の住人ともなると
やたら懐かしい。

ある朝、家中が騒がしくなつ
た。カラスが一羽舞い降りたの
だ。その日から、雀の姿が暫く
の間見えなくなつた。

丸山に住むカラスはいつたい
何羽いるのだろう。夕暮れにな
ると三々五々帰つて来て、一度
は静まり返つてから、誰かに合
図されたように全員が一斉に空
に飛び出す。

空を覆う黒い大集団は、見事
という外ない。しかもそれを二
回ないし三回繰り返すのだ。
あれは今でもやつているのだ
ろうか、と時々思い出す。子供
の頃からそれを見慣れて、カラ
スはそうゆうものだと決めてい
たが、思えば他の鳥にそんな習

性があるとは聞いたこともな
い。誰かが始め、誰かが受け継
ぐことで、次第に進化して今がある
ことを改めて知る。

毎月届く『せたかむい』は、
短歌と俳句が今の古平を如実に
写しているが、他は全文「故事
来歴」であり、私などは、忘れ
かけていたカラスのことまで
想い出す。

戦争をはさんでたつた三十年
の古平生活ではあるが、今にな
るとすべてが「故事来歴」と言
える。

人生にとつて不要な部分など
無いはず。舌打ちしたくなる程
の悔悟の時があつたにしても、
時と共に滋養ともなる。

誰が、何時、何のために造つ
たのか、丸山周辺だけでも幾つ
かの祠があつた。大人達が造
られた。神壇も神棚も同居している家
に生まれ、結婚式は教会で挙
げ、子供が生まれれば神社へ、
葬儀は寺でという、「来歴」は
どうであれ、「故事」の一つず
つを手際よく使いこなしている
カラスを懐かしんでいる者も

そのほとんどが古平大火で燃
え、無くなり、歴史の中から姿
を消し去つた。現代に必要不可
欠のものであれば誰かが懸命に
再建したろうに、断固とした哲
理も畏敬の念も無くなれば、遊
び場だけの想い出となろう。も
ちろんのこと、語り継ぐ必要も
なくなる。

クリスチヤンの家に七年も居
て、毎朝、賛美歌を合唱させら
れたり、聖書を読まされたりも
した。クリスマスの時期が来て
祝いの何かがあるのかと期待し
ていたが、「キリスト教と何か関
係があるのか」と、逆に詰問さ
れ鼻白んだ想い出がある。

古平に、繁榮をもたらした鮓
はいつに間にか北の海に去り、
それ以後の町は一万台の人口が
現在四千人を少し上回るだけと
なつた。比較しても住民の幸、
不幸には何の価値もない。その
町の「故事」や「来歴」の中
で、新しく、豊かな歴史を創つ
ていただきたい。

れようと、バカどころか立派な
知恵で今を横切つているのかも
知らない。皆が渡れば確かに恐
くないようだ。

「よさこいソーラン」の賑わい
が始まる。札幌祭りの行事は
細々と続いているが、どんな神
で、どんな働きをするのか誰も
知らないし、知ろうともしない
から別なモノが出て来て、現実
の楽しさや役に立てばそちらに
人心は移行する。

戦後の古平で、生きて帰つた
若者達はその喜びを表現する
手段として、神輿を担いで駆
け廻つた。「何で?」と自問
する頃、その青年団すら無くな
つた。

古平に、繁榮をもたらした鮓
はいつに間にか北の海に去り、
それ以後の町は一万台の人口が
現在四千人を少し上回るだけと
なつた。比較しても住民の幸、
不幸には何の価値もない。その
町の「故事」や「来歴」の中
で、新しく、豊かな歴史を創つ
ていただきたい。

カラスを懐かしんでいる者も
少なくないはずです。

中、戦

泣き笑いの体験記

後、戦

終戦の放送も知らないまま、
祖国の土を踏むこともなく、戦
禍に倒れた人達のことを思うと
まことに痛ましい限りです。

北緯50度を南北に分けた
日ソ両国の国境の標識

援軍来たら 北緯五〇度の
ソ連軍が参戦以前から
集結をしていて無法な発砲など
を繰り替えしていたが、日本軍
はソ連の参戦を予期できずに、
兵員や武器の増強もせず油断
していました。

ソ連軍は戦車も投入して進撃
し、国境付近を警備する守備隊
は決死の防戦に努めた結果、悲
劇的な損害を受けたと聞いてい
ました。

終戦後もさら

八月一七日

に戦闘が続く になつて軍

終戦の直前に、ソ連軍が圧倒
的な兵力で国境を突破すると日
本軍はたちまち大苦戦におちい
ります。

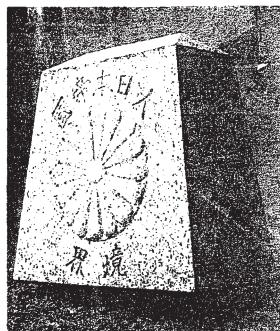
その内容は「今後は積極的な戦
闘は止め、自衛戦闘で対抗する
こと」という、極めて意味のあ
いまいなものでした。これによ
り、さらに戦死者の数が増えて
いったのです。

こんなところにも車上層部の
混乱が見られ、ソ連軍との間に
停戦交渉が成立し、戦闘がすべ
て終了したのは八月二三日のこ
とだといいます。なんと、終戦
から一週間も無意味な戦闘が行
なった家の主人が日本刀を振る
つて一家心中をはかつたり、身
部下を叱りつけた上官もいたと
いわれています。

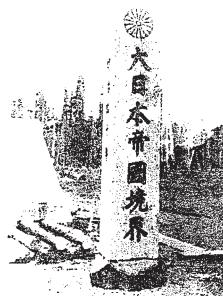
上官が玉音 そして八月一
放送を否定

五日、天皇による終戦の放送が行われました
が、「これは敵の謀略だ。このことは決して口にするな」と、
部下を叱りつけた上官もいたといわれています。

終戦後もさら 八月一七日
に戦闘が続く になつて軍
はようやく終戦を発表したが、
その内容は「今後は積極的な戦
闘は止め、自衛戦闘で対抗する
こと」という、極めて意味のあ
いまいなものでした。これによ
り、さらに戦死者の数が増えて
いったのです。



国境線を示す石柱



中間に建つ標木

戦後に起 後で聞いた話で
きた悲劇 すぐに戦場となつ
た国境付近の町では、逃げ場を
失った家の主人が日本刀を振る
つて一家心中をはかつたり、身
を守るために若い女性の集団自
殺、拉致された町長や警防団

長、警察官が銃殺されるなどが
起きました。
また、勤労奉仕隊が解散され
て帰宅して見ると我が家は焼失
しましたとか、こんな事実は尽き
ませんでした。
戦争の惨禍と樺 太島民の悲しみ 樺太では
か一週間で、全島で推定約四千
七百人の死者が出ていたと言
われていますが、当時は詳しい
報道などは一切なく、その後
も真相解明への進展も全くあ
りません。沖縄や広島・長崎の
原爆、中国などからの引き揚げ
の悲劇はもちろんですが、本道
に近い樺太の実情は余り知られ
ていません。帰りたいと念願し
ていた祖国にも帰れず、この
戦争の事実が欠落し、日の当た
らぬまま高齢化する元島民だけ
の思い出として、このまま歳月
の流れと共に消え去ってしまう
のはまことに悲しい限りです。

戦争の事実が欠落し、日の当た
らぬまま高齢化する元島民だけ
の思い出として、このまま歳月
の流れと共に消え去ってしまう
のはまことに悲しい限りです。
ただただ地球上に戦争の再び
起ころないことを祈念するばかり
です。

(続く)

古平いろはうた

ふるさ、との

海としのんで三言詩

古平町内には現在約五〇基を数える大小の記念碑が建つていますが、うち文学碑が一基あります。その数の多いことも目立っています。

その中で郷土の詩人として、日本の詩壇に大きな影響を与えた吉田一穂の石碑が五基あります。詩は難解だと言われていますが、今もなお熱烈なファンがいて、詩碑などを訪れる人達が絶えません。

詩碑の一つである『魚歌』詩碑は、比較的わかりやすく、積丹半島の風土と重ね合わせて人気の高い詩碑でもあります。

鳥 跡 汀
拾 流 木
燒 魚 介
勺 潛 酒
波 涛 声
触 騒 洞

魚 歌

鳥たつあと海辺に
打ち上げられし木を拾い
魚を焼きてにごり酒
ひとりしくめば夕波の
声もおどろに波騒ぐ

この『魚歌』は、昭和一一年二月に函館に住んでいて亡くなつた妹ヨシエの死を悼み、四月に『挽歌』として雑誌に発表されました。

その後『哀歌』と改題され

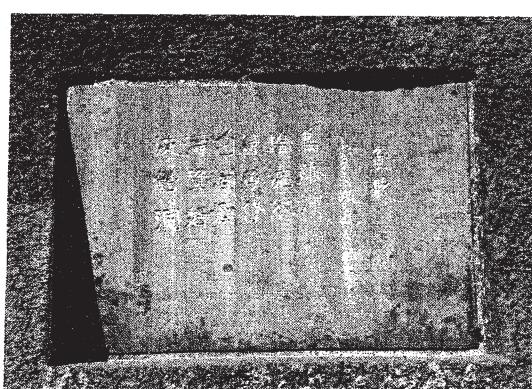
て、同年暮れに発行の第三詩集「稗子伝」に収められたが、詩のあとにあつた短歌の代わりに俳句を先において、現在の形に改められました。題も『魚歌』と変えて、昭和二三年に刊行された第四詩集「未来者」に収められました。これが詩碑に刻されているものです。

漢字・三文字による六行の詩は大変珍しく、同形の詩は外にありません。

△昭和33年・水見悠々子が自費によつて建立△
一穂が書いたとしたらまた別の表記になつていたかも知れません。



←碑面に刻された一穂自筆の『魚歌』



← 嶺島神社境内に建つ
魚歌詩碑

一穂がかつて過ごした故郷と慕う古平をしのび、望郷の句としても秀句であるとの評価をうけています。

一穂は、最初の詩ができるから一〇年も経つてから、短歌と俳句を入れ換えてまた発表したわけで、この詩に対する並々ならぬ愛着がうかがわれます。

この詩に限らず一穂は同じ詩に何度も手を入れています。言葉に対する恐ろしい程の執念を感じますが、それが詩人というもののだとも思います。

霧開氣は伝わ
つてくるよう
ですが、如何
でしようか。

なく詩のもつ
でみると何と
いうか。

魚歌の冒頭

の一句は秋
の句ですが、

ラッパ修業兵を命ず（続く）
早速同年兵の川口岩雄と二人
で、中村中隊長の部屋に報告に
行つたら、「優秀な成績だつたと連隊本部
から報告があつた。良くがんば
つた。おめでとう」

と、お褒めの言葉があ
つた。

戦友の川口岩雄も努
力はしたが、ラッパの

吹奏の方は素質がなく、
『ガタラッパ』の仲間入
りをしそうだった。これ
だけは死ぬ程努力しても、

どうにもならない現実が
ある。

彼の努力は認めるが、
私も戦友として手助けを
してやる方法はない。

私は、軍隊と云うこ
ろは、体力がないため人
並み以上の苦労をしなけ
ればならないので、好き
ではないかった、というよ

り嫌いだつたという方が正解だ
つたと思う。だから人より先に
進級しようなどと考えたことも
なく、上方にゴマをするよう

老兵の綴り方

あゝ樺太国境子弟備隊

橘義春

(15)

冬季演習
(第一回)
昭和一九年三月、冬季演習が行
われた。私は新米のラッパ手だ
が、白尾上等兵と私が中隊の指揮
班のラッパ手として選ばれた。中
隊の庭に全員整列し、私と白尾上等兵が隊
列の先頭になり、行進ラッパを交互に吹きながら練兵場まで行
なこともなかつた。このような
私が今にして思えば、軍隊生活
の中でこれ程努力し、まじめに
勉強し、一生懸命にやつたこと
はほかにない。ラッパ手になる
ことが、天から与えられた私の
軍人としての使命だつたかも知
れない。

「軍旗に対し捧げ銃！」
の号令で『足曳き』の曲を吹いたが、どうも様子がおかしい。
私が一人で吹いているのではないか？しかし、新米のラッパ手としてはよく響いていたよう
な気がする。実は三千人程の兵隊の敬礼ラッパを、私一人で吹いていたのだ。あとでほかのラッパ手二、三人に聞いたところ、「誰かが吹くだろう」と、

そう思つていたという無責任な答が返ってきた。ラッパ手が八〇人もいながら、もしこのうなつていたのだろう。全く冷れだがスキーをやつたことがなく、ころころと転んでばかりいてどうにもならなくなり、ついにはスキーヒストックと銃を肩に担ぎ、半ベソをかきながら行軍していた。見えてても大変

なこともなかつた。この頃、私の部隊は汽車で南下した。
各中隊の整列が終わつたところで、軍旗が衛兵に守られて練兵場の中央まで進んで来た。軍旗が台の上に上がつた時、連隊副官が「軍旗に敬礼します」と突然言つたので、各中隊もあわてて銃に着剣した。私も多少まごついたが肩から掛けっていたラッパをはずし、いつでも演奏できるような態勢を整えた。
私の部隊は汽車で南下した。
一番上の兄・光雄が、召集で上敷香の四二部隊に来ている。兄弟が仮装の敵味方に別れて戦うことになる。ひょっとしたら逢えるかも知れない——そんな思いもあつた。

私の部隊は汽車で南下した。
やつていたので、雪の中では歩くよりスキーの方がずっと楽だが、スキーの経験のない者にとっては大変な演習だったと思ふ。中村中隊長はスキーのペランでその滑り方も大変スマートである。大国見習仕官は台湾の生まれなので、雪などは軍隊に入るまで見たこともないそうう。中村中隊長はスキーのペランで、スキーには大分苦労していただようだ。
戦友の松谷久美も北海道生まれだがスキーをやつたことがなく、ころころと転んでばかりいてどうにもならなくなり、ついにはスキーヒストックと銃を肩に担ぎ、半ベソをかきながら行軍していた。見えてても大変

この冬季演習は、上敷香の要

一二四二部隊を仮想敵部隊とし
だつたと思う。へ続く

「連作 古平まで」

坂本甚衛

(一) ところで、『せたかむい』を

私は紹介してくれたのは石狩市に住む葛西庸三氏だった。

自分が住んでいる町の文化的所業を、他の町に住む友人に教えてもらうのも変な話だが、何しろ引っ越して来たばかりで私はその所在を知らなかつた。

葛西氏は以前、古平小の教頭として在町していた時期があり、その後、余市黒川小へ栄転、校長としての定年後は余市町議に推されて当選二期を重ねた。惜しまれつつ引退するとかねて石狩市に新築していった家へ、さながら夏の涼風のように行くつて行つてしまつた。

確か私が当町へ越して来る一年程前だつたと思う。余市にお住

まいの節は、文芸上の会合などがあると近所の私も一員に加え

ていただき、よく面倒をみてくださいました。

また、全国に知られた同人誌『人間像』の古くからの同人で、石狩に移るまでは『余市文芸』の編集もしておられた。私の仲はそれ以前になる。恩師

でもあり、余市近辺を舞台にした小説で世に知られた作家・朝谷耿三(本名・川端義平)老が編集しておられた時代からの付き合いだつた。長年寄稿し続けていた拙稿を読み、声をかけてくれたのが始まりだつたと記憶する。私にすれば文学上の畏友であり、氏の著した著書には深く感銘を受けたものである。

私が古平へ移つて来て間もなく、氏から届いた手紙に『せた

（決してお世辞ではなく）
「年表で読む古平の歴史」を表紙面に、「高野名幸作さんの日記」と続く。日記の文章は天下一品、簡にして要を得ている。

大澤文子、吉川義雄、吉野慶一郎、橋義春、水見壽男各氏の名

コラムは何れも甲乙つけ難い出来である。僅か十二ページしかそこらの紙数に、かつて殷賑を極めたこの町の盛衰が凝縮され息づいている。うん、面白い。私はほくそ笑んだ。さすがは葛西氏、その作家的眼力においてまさか変なものは焼めはしまい、

と思つていたがまさにその通りだつた。

遠い昔、依頼されてマンガン鉱脈探査を行うための地質調査にかり出され、生まれて初めて坑内へ入つた四十日間のことが懐旧を以て胸を噛んだ。その時、私の脳裏によく知られた前記の句とは違う、もう一つの句が泡粒のように湧き上がり弾けた。

— 来てみれば蛭ヶ島は麦煙、というのである。詠み人は知らない。記憶の回路を辿つてみると、確かに源頼朝が幼少にし

入手してみたら、ということだった。早速、村井氏に連絡、郵便局や近くの海洋センターなど公共機関にあることを知つた。

その年の六月だった。私は春から入会していった「生きがい学級」で、稻倉石の廃鉱跡へバスで見学に赴いた。説明担当は村井氏だった。緩い登り坂の斜面に連なつていた社宅の長屋や工場、高い煙突は影も形も無く、音をたてて流れ下るきれいな急流の沢なりに、高く透んだ初夏の蒼穹が広がつっていた。

— 夏草やつわものどもが夢の跡、である。

俳句鑑賞

お楽しみコーナー

△

俳誌 悠主宰 水見壽男

期待

俳誌ホトトギスは、十七年四月号で千三百号を

<10>
数えます。そのため、平成一六年は四月八日の虚子忌を中心に記念行事が組まれ、世界で一番古い歴史を持つ文芸誌の祝賀会が東京、その他の都市で行われることになります。

そんな準備を進めていた昨年十一月二十一日の大安に、朗報が飛び込んできました。

畏友越野清治さんが、平成十六年一月号でホトギスの同人に推薦されたのです。ピックニュー・ス、私は思わず「オウツ」と叫んでしまいました。早速、越野さんにお祝いの電話をかけました。

越野さんはそのお人柄のとおり、じつくり重厚に仕事を押し進めるタイプです。俳句づくりにあつても、脇を堅め腰を低く下げ基本をまず第一に構えます。すなわち写生です。その写生を重ねてゆく中で、自己主張し力を蓄えて一閃の光芒を放つのです。派手さはありませんが、それだけに説得力のある俳句を作り、自然と対話しながら共生し、攻めてゆくのです。自然是越野さんに攻めて来た分のお返しとして、すばらしい句を授けます。俳句づいています。

くりにとつて、自然は大きな包容力のある鏡なんですね。

今から四十年前の昭和三十四年ホトトギス一

月号で、古平初のホトトギス同人が誕生しました。誰あろう親父水見悠久子です。親父は昭和初頭から俳句を始め、三十多年後の虚子生前最後

の同人であることを誇りとしていました。明治の男らしい矜持を持ち、俳句と格闘する姿を私は目の当たりにしていました。それ故か息子の私はに対する教育にも厳しいところがありました。私を俳人として認めたのは、私が昭和五十五年にホトトギス同人に推薦された時からで、甘言はたたかず、辛口を旨としていました。今日の私のあるのは、その親父の教育の力あつてのものと諾っています。

俳句は広く庶民に親しまれる日常の文芸・詩です。これから越野さんにはホトトギス同人は勿論ですが、古平俳句会の代表として牽引車になつていただきたいと期待しています。それから今後は大人の世界のみならず、少年少女たちにも俳句の世界を広めたいと願っています。

△一月号は一六ページにしたところ大変好評で、百部多い六百五十部印刷しましたが早々に品切れになりました。今後もページ数を増やしてみたいのですが、あまり時間もかけられないでこれから問題です。

▽高橋健一さんから『船籠札』木札一枚寄付があり、いつもながらありがとうございます。

△日も長くなり、何となく気持ちは「春遠からじ」でしょうか。

古平町岬短歌会



古平俳句会

牧場の画見るが如しも今日の空浮く白雲は羊にも似て
石倉を這う薦もみぢ映る運河べりゆく足を止めつつ

池田田テル

元旦に届くを願ひ日を数へカナダの姪へ賀状を出だす
正月に寄りたる孫ら少女さび着物姿に家中華やぐ

鈴木時子

原発にかかるはりあるか前浜に越前クラゲ打ち上げられて
初春の藍深き海おだやかに漁は大漁浜は活気に

田中香苗

車窓より見る裸木のそびえ立つ雪にも風にもおもねる事なく
吹雪止み天つ日のさし空青し自ずからわれ手を合はせたり

丹後初江

穏やかなお正月なり子の家に雲より出でし初日を仰ぐ
「おはよう」と一日始まる冬の日に鉢の三ツ葉の新葉の緑

東美知

湯気たちて厨はにはかに忙しく今日は佳き日と年の餅つく
葉を巻きし鉢の万年青の赤き実は雪の窓辺に日を吸ひてをり

堀典子

天帝の怒か吹雪をさまらず 齊藤波留
熱爛で今日と云う日をしめくくる 山口悦子
漁火の見上ぐる天に冬の雲 越野敏雄
煮凝に亡母の笑顔すけて見ゆ 大和田絵伊
除雪車の残せし雪の後始末 福井幸平
海静か凍星遠く近くあり 高橋重子
旅を継ぎ群来る湖の大白鳥 仲谷比呂吉
淡雪の風と遊びて土に消ゆ 室谷弘子
荒波や岬にかもめ年明くる 泉清三
小春日の海静かなり浜歩く 外山俊久
波濤越えシベリア風浜に座す 渡辺嘉之
虚子俳話訪ねる旅や暮れ早し 堀典子
灯台の手繰り寄せゐる北風の波 越野清治
(ホトトギス同人)

快報 昨年二月古平俳句会公演の越野清治さんが、日頃の研鑽と精進が実り、ホトトギス同人に推薦されました。古平町では水見悠々子に次いで一人目の快挙です。おめでとうございます。

古平町史年表

昭和4年(1929)～続き

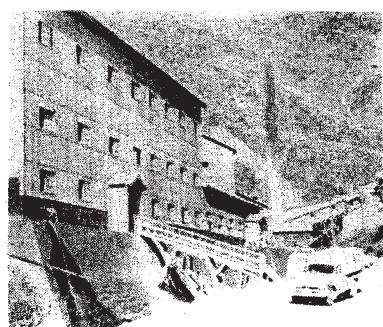
- ▲鉄道敷設の請願が衆議院で採択されされたことから、鉄道漁港期成同盟会総会で種田道議がその運動経過について説明する
- ▲古平町東部(浜町方面)・西部(新地町方面)火災予防組合が設立される
- ▲関東大震災7周年に、祝聖会(鶴見寺住職・秋田居善和尚主催)が禁酒デーを設ける
- ▲井戸水が原因で腸チブスが発生し、27人の患者が出る
- ▲江木鉄道大臣が来道し、町長らが札幌で鉄道敷設の陳情をする
- ▲農事実行組合の粉摺り(もみり)工場が落成する
- ▲役場付近の数軒の家で腸チブスが発生し、付近の住民に予防注射を行う
- ▲古平尋常高等小学校鴨居木分教場が創立20周年記念式典を行う
- ▲鉄道漁港期成同盟会で町長ほかが陳情のため、信用組合から借り入れをして上京する
- ▲磯舟でタラ漁に出た丸山町の漁師(低賃)が吹雪のため遭難し、行方不明となる
- ▲サメが好漁で1尾30錢(スケソ1尾1錢2厘)
- ▲鉄興社が稲倉石鉱山を買収し、12/1から操業をする
- ▲チョペタン沢の灌漑溝掘削が始まる
- ▲古平～小樽間の貨物輸送(漁・運搬)に共栄丸が就航する
- ▲後志沿岸の漁民が、鮭不漁による救済米を道庁に陳情する
- ▲船入潤築設の起債を申請が、ようやく内務省の承認を得て大蔵省に回付される段階となる
- ▲北海道拓殖銀行美国支店が古平支店に合併される
- ▲40町歩の造田が行われ、合計83町歩となる。収穫高1,200石(900トン)で前年比4割4分の増収となる
- ▲12月末現在、古平町の人口7,182人(男3,472人・女3,710人) 戸数1,400戸 前年比人口-15人、戸数-9戸

昭和5年(1930)

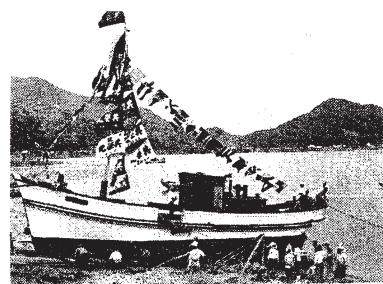
- ▲昭和3年6月以来町長不在が続いたが、2/16付で古平町長に武田典が任命される
- ▲昭和3、4年と鮭の凶漁が続き、一般・特別会計予算の更正を計7回も行い、学校職員、町吏員の給与も減額になる
- △前年10月、閣議で政府の緊縮財政による官吏の1割減給を決定したが、猛反対があり政府が撤回する



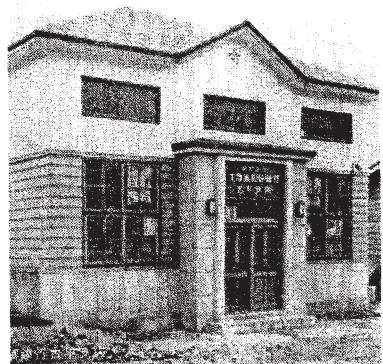
↑部落民の労力奉仕で校庭の拡張工事



↑稲倉石鉱山第2選鉱場



↑本陣の浜で共栄丸の進水



↑拓銀旧店舗(新地町)